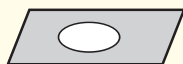


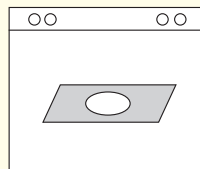
オートクレーブ処理による抗原賦活化

- *各ステップでの反応温度、反応時間は厳密に守ること。
- *特に温度指定のない場合は、常温(15~25℃)で操作すること。
- *染色結果に影響を及ぼす為、必ず下記の操作手順に従って操作を行うこと。

● 検体準備

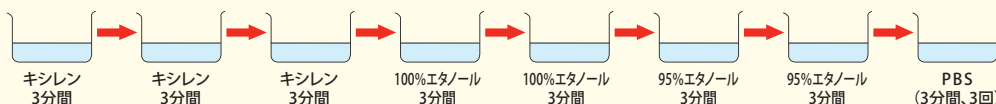


50℃で十分に湯伸ばした切片(3-4μm厚)をシランなどのコーティングスライド上に貼り付ける。



切片を恒温器で十分乾燥させる。(37℃ 24時間)

● 脱パラフィン



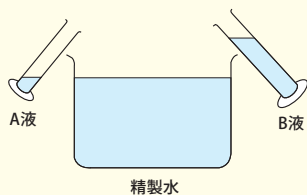
- *各ステップごとによく液を切る。
- *脱パラフィンを完全にするために、各溶液はスライド40枚ごとに取り換えることが好ましい。

● 抗原賦活化液の調製

ヒストファイン 抗原賦活化液pH9(コード:415201または415211)を用いる場合

- ・調製済(コード:415201)は、そのまま使用する。
- ・10倍濃縮(コード:415211)は、精製水で10倍希釈する。

10mMクエン酸ナトリウム緩衝液(pH6.0)を用いる場合



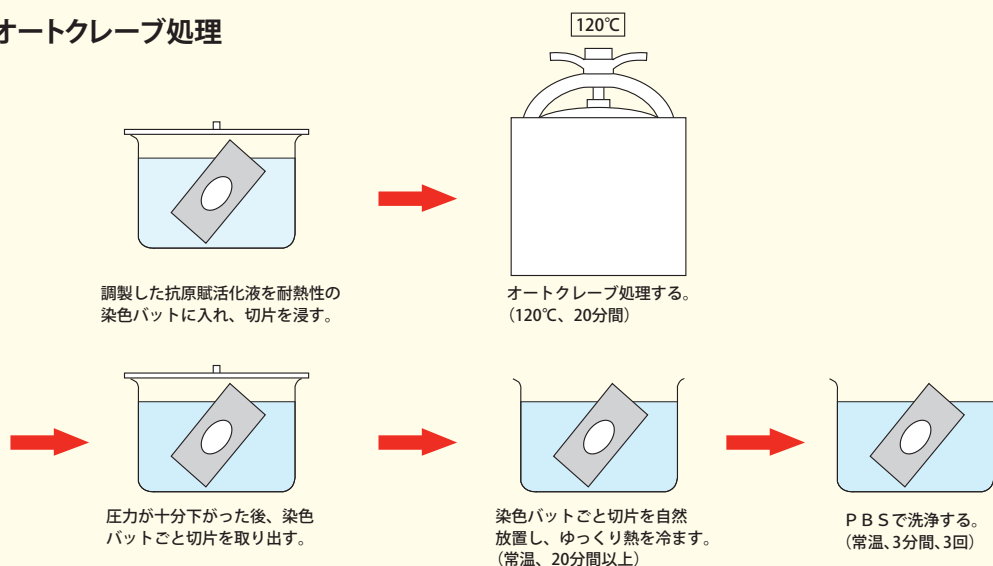
精製水450mLにA液9mLおよびB液41mLを加えよく混和する。緩衝液は用時調製する。

10mMクエン酸ナトリウム緩衝液(pH6.0)の調製方法
A液9mL+B液41mL+精製水450mL(用時調製)

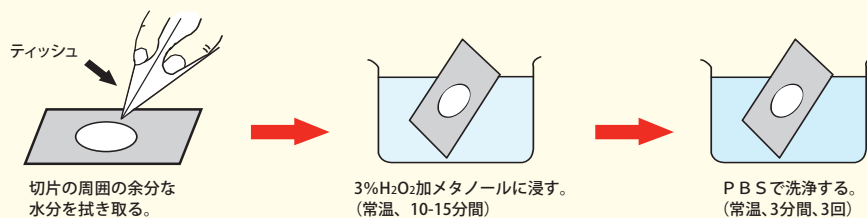
- A液 (0.1Mクエン酸水溶液)：常温で保存可能
クエン酸一水和物(C₆H₈O₇・H₂O) 2.1g/精製水100mL
- B液 (0.1Mクエン酸ナトリウム水溶液)：常温で保存可能
クエン酸三ナトリウム二水和物(C₆H₅O₇Na₃・2H₂O) 14.7g/精製水500mL



●オートクレーブ処理



●ブロッキング試薬 I による処理 (3%過酸化水素加メタノールによる内因性ペルオキシダーゼ除去)



- *ブロッキング試薬 I による内因性ペルオキシダーゼ除去はオートクレーブ処理の前に行ってもよい。
- *オートクレーブ処理後は、染色バットおよび抗原賦活化液等が高温になっているため、これらを取り扱う際は、手袋等を使用して火傷に注意する。